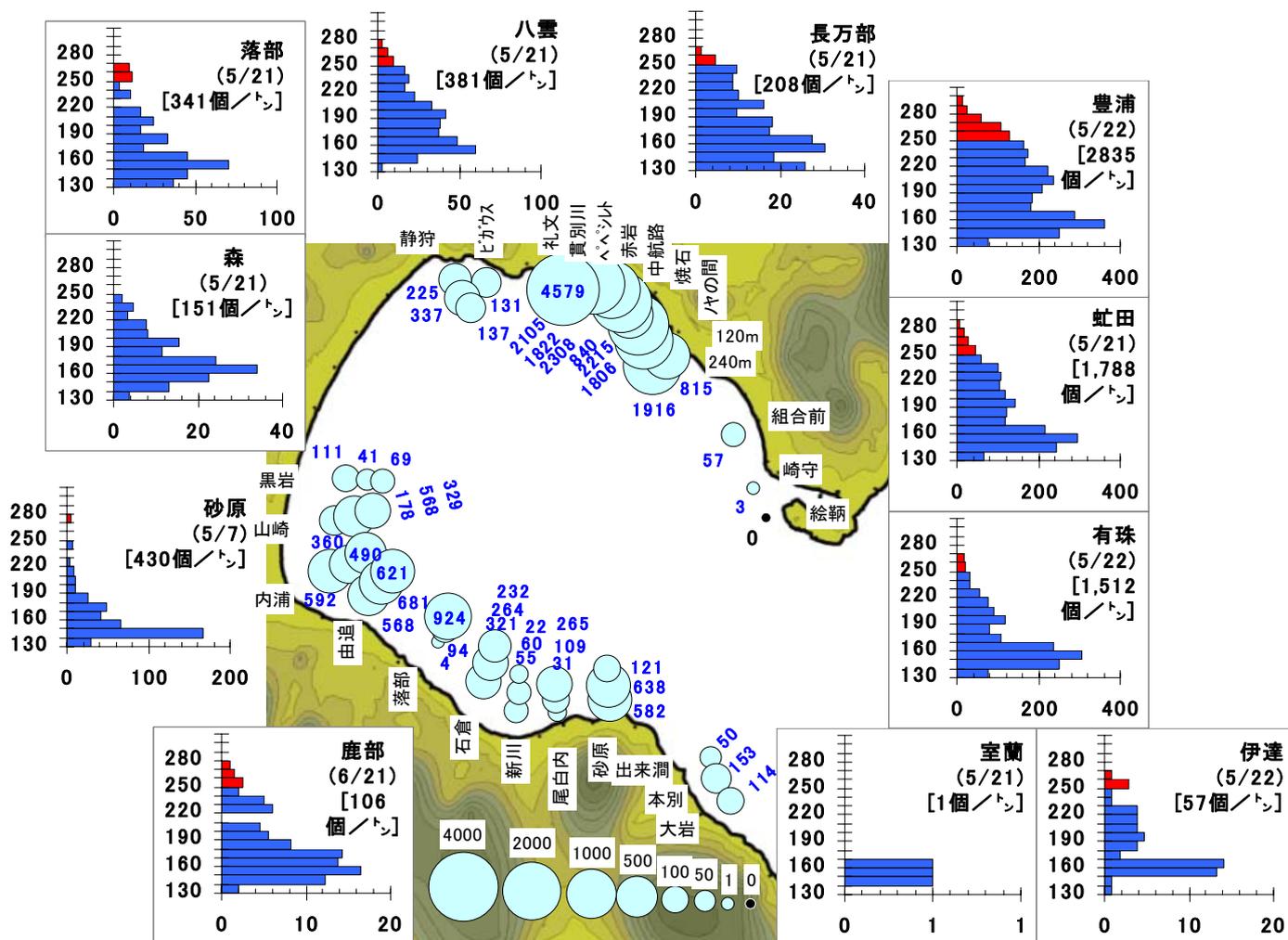


# 第4回噴火湾ホタテガイ情報 (2012年) 発行日：平成24年5月28日

函館水産試験場・栽培水産試験場・釧路水産試験場、胆振・渡島北部・渡島中部地区水産技術普及指導所

有珠～豊浦と八雲（内浦）～砂原に多くのラーバが観察されました。

図1. ホタテガイラーバの分布状況(5/21～5/22)、丸の大きさと添付数字はラーバ密度(個/ト)、棒グラフの縦軸は殻長(μm)、横軸は個体数。



【概要】 5月21～22日に、各地区指導所により噴火湾沿岸部のラーバ調査が行われました。有珠～豊浦と八雲（内浦）～砂原に多くのラーバが観察されました。胆振側湾口部の室蘭～伊達にかけては0～57個/トと少ない状況ですが、有珠～豊浦では815～4579個/トと多くのラーバが観察されました。渡島側でも、300個/トを超える地区が多く、ラーバの出現は順調です。

各地区水産技術普及指導所の「ホタテガイ採苗情報」では、大型のラーバがみられはじめたことから、採苗の準備をするよう指示されています。各地区水産技術普及指導所の採苗情報を参考にして、採苗作業の準備をしてください。

5月23日に予定されていた、用船による全湾調査はシケのため中止になりました。次回の全湾のラーバ及び環境調査は、6月4～6日に、函館水試試験調査船金星丸で実施する予定です。

(連絡先：北海道立総合研究機構 函館水産試験場 調査研究部 管理増殖グループ 馬場・渡野邊・金森・佐藤)

この情報は函館水試のホームページからもご覧いただけます。http://www.fishexp.hro.or.jp/exp/hakodate/

【貝毒プランクトン情報】

（麻痺性）図2に今年の麻痺性貝毒プランクトンの出現状況を過去と比較しました。現在、麻痺性貝毒プランクトンの密度は低下しており、消滅した地点もあります{森5/24(0個/L)、虻田5/21(30個/L)}。今年の麻痺性貝毒プランクトンのピークは過ぎたと考えられます。過去の結果から考えて、麻痺性貝毒プランクトンが今後増加する可能性は低く、今年は麻痺性貝毒については低毒化年になると予測されます。

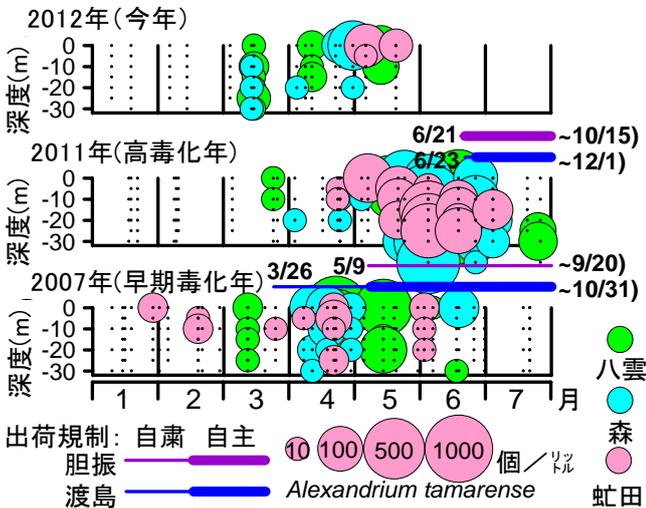


図2. 麻痺性貝毒プランクトン（タマレンセ）の季節変化の年比較 [2007年は毒化が早くベビー（耳吊りの残り）の出荷が規制された年、2011年は1995年以降で2004年に次いで2番目の高毒化年]

（下痢性）図3に今年の下痢性貝毒プランクトンの出現状況を示しました。胆振側では出荷規制は実施されていません。渡島側では4/7に自粛規制が開始され、4/27には一旦解除されましたが、5/10から再び自粛規制が実施され、現在継続中です。この自粛規制の期間は、下痢性貝毒プランクトンのアキミナータとルベジカの密度の変動と一致しています。原因プランクトンはこれら2種と考えられます。現在、アキミナータの密度は低下中です。今後は、アキミナータの減少と共に毒性値も低下していくと考えられます。夏に出現するフォルティの密度が高ければ、再び毒性値が上がる可能性があります。

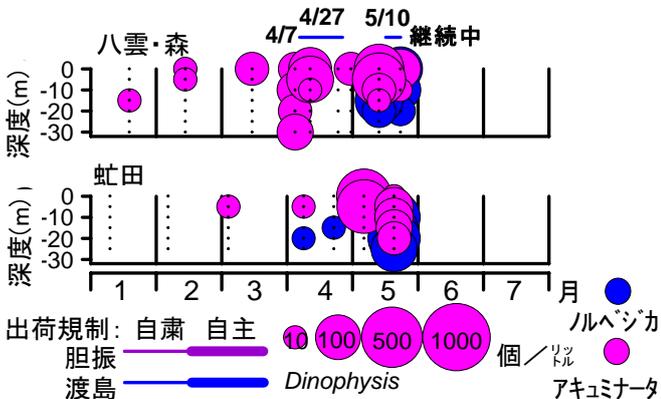


図3. 下痢性貝毒プランクトン密度の季節変化（今年、上図：八雲と森、下図：虻田）

【貝毒プランクトンの紹介】

貝毒の原因となるのは渦鞭毛藻（ウズペンケウワ）という微小な植物プランクトンで、貝毒プランクトンと呼ばれます。この毒を持つプランクトンを杓柄ガイが食べることで、毒が蓄積されて貝毒を引き起こします。なお、杓柄ガイの毒化状況は厳重に監視されているため、毒化した杓柄ガイが市場に出ることはありません。噴火湾には、2種の麻痺性貝毒プランクトン（図4）と9種の下痢性貝毒プランクトン（図5）が出現します。

麻痺性貝毒プランクトンのうち、タマレンセは毒性が強く出現密度も高くなる事から、貝毒の主な原因種となります。一方、オステンフェルディは毒が弱く、出現密度も低いことから、貝毒の原因にはなりません。麻痺性貝毒プランクトンは春先に出現を開始し、6月頃急速に消滅します。

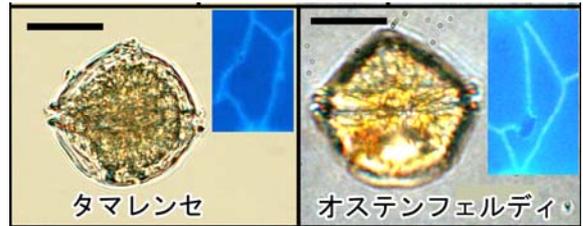


図4. 麻痺性貝毒プランクトンの写真（バー：20μm）

下痢性貝毒プランクトンは、図5のように季節ごとに出現する種が違います。貝毒の原因となるのは、主に、春のアキミナータとルベジカおよび夏のフォルティです。ごくまれにトリボスが原因となることもあります。その他は、毒性が低いか、出現密度が低く、貝毒の原因になりにくいと考えられます。



図5. 下痢性貝毒プランクトンの写真（バー：20μm）